



若者

“境界”に見える普遍性

小西 毅*

Universality at Boundary

Key Words : Universality, Boundary, Venture, Business Laboratory

「はじめに」

若者というテーマのコラムへの投稿と聞いて、変なようですが“若者って何だろう?”と不思議な感じを覚えました。私自身、若者であると感じる時があれば、それとは違うものを感じる時もある微妙な年齢になってきており、“若者”ということについての“境界”に立たされているような感じを何となく持っていました。そういうわけで、この原稿への取り組みも、まず“今の自分＝若者”なんだと自分に自覚させるところから始まりました。

「若者？」

よく考えて見ると、私にこのコラムへの投稿を進めて下さった先生のみからみられれば、私は疑いもなく若者であるわけなのですが、例えば研究室の学生さんからみると彼等自身こそが若者であり、私はもはやその仲間には入れてもらえない部分があるわけです。このように若者であるか否かということは多分に相対的な要素を含んでいます。このことは、若者であるか否かに限らずいろんな局面で、“自分とは?”に

ついて体験することとも言い替えることができるように思います。このような一種の“自分探し”は一生続いていく作業なのでしょうし、若輩者の私とその全てを語ることなど到底不可能なことです。また、その疑問への答えも時事刻々変化していくのでしょうけれども、この原稿への取り組みを通じて今の自分を振り替えて見る機会を改めて戴き、同じ様ないくつかの体験について今現在の私からみて感じたことをここでは書かさせていただこうと思います。

「ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー」

一昨年より、吹田キャンパス内にできたベンチャー・ビジネス・ラボラトリーにて、自分の研究の時間のある部分を授けていただく機会に恵まれました。テーマに沿ったさまざまな研究者(教官)の方々が集まられて、最先端の研究を進めていこうとしている研究施設という説明で、ここでの引用の目的としては十分だと思いますので、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーの詳しい説明は、ここでは割愛させていただきます。

私自身、自分とはテーマを同じくする研究者の方々とおつきあいは、これまである程度させて戴いてきたつもりでした。しかし、学内の先生方と研究でかなりオープンにおつきあえる機会というのは、皆無ではありませんが、あまり無かったように思います。そんな中でのベンチャー・ビジネス・ラボラトリーというものは、いろんな意味である種の新鮮な驚きを伴うものでした。

話をもどして、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーにおいて実際に共同研究が行えるよう

*Tsuyoshi KONISHI
1968年12月23日生
1995年大阪大学大学院工学研究科
博士後期課程応用物理学専攻修了
現在、大阪大学大学院工学研究科、
物質・生命工学専攻、助手、博士
(工学)、光情報処理
TEL 06-879-7931
FAX 06-879-7295
E-Mail konishi@ap.eng.
osaka-u.ac.jp



な機会には残念ながら恵まれていないのですが、いろんな先生方にお会いし、お話しする機会が増えたことは確かです。ある程度テーマを同じくした研究者が集まっているわけですから、研究に関する文化、考え方などの違いは実際にはそんなに違うものではなく、割合微妙なものです。ところが、この微妙さが曲者です。違いが微妙であればあるほど、その違いが逆に際だって見えたりするものです。もし周りの研究者の方々が、ある程度異分野の方々であれば、違うということに何の疑問も持たなかったでしょう。つまり私自身が“若者”という言葉で最初首をひねったのと同じ状況です。そのとき、自分の中に改めてクローズアップされた自分自身というものに新たな驚きを覚えたわけです。

「海外の研究者との交流」

次は少し話を変えて、海外の研究者との交流を通じた体験について書いて見たいと思います。何かアイデンティティを自覚する最も一般的な瞬間は、国際的な交流のときではないでしょうか。海外の研究者との交流に関しては、私なんかよりもずっと経験が豊富な方々が数え切れないほどおられるにもかかわらず、敢えて若輩者の私がこの話題をとりあげるのには理由があります。この原稿のなかで私が書いている“自分探し”についての新鮮な体験は逆に私のような若輩者のほうが身近に持っているのではというささやかな驕りのためです。

研究を通じて親しくさせて戴いている私の海外の友人の住んでいる町を訪問した時のことです。彼の町を案内してもらったり、公私の区別なくいろいろな方々を紹介して戴き、非常に楽しく有意義な時を過ごさせて戴きました。その中で、確かにその町の美しさや歴史に感銘することは言うまでも無かったのですが、それ以上に、その地に生まれ、また住んでいることに誇りと愛着をもっていることが窺える幾つもの言葉に非常に心打たれるものがありました。もちろん心打たれていたのは私の方だけで、彼は全く気負いもなく言っているのけていたのですが、一方で、町全体が中世を彷彿させており、その町の全ての時間と場所がどこかはるか昔の何か

に繋がっているような気がしました。というと、その町はおそらくのどかな田舎町だと思われるかもしれませんが、その国の首都だったわけです。日本であれば、このような町の史物は、文化財になって立ち入ることもできないように保護されてしまっているのでしょうか。そこにある“良いものは、いつの時代も良い”という考え方がとても新鮮なのは驚きでした。

「境界に見える普遍性」

2つの話を通じて、私が感じたものはおそらく“境界”というものの存在だという気がします。やり方次第で、境界は垣根になることもあれば、お互いの融合が可能な場所にもなります。私自身の研究は、分類すれば大きく自然科学に含まれておりますし、研究の対象になっているものは、最終的には自然現象です。その自然現象に境界がもともとあるわけがありませんが、研究の便宜上、はたまた解釈の便宜上でその自然現象がいくつかの分野に分けて研究されているのが実際です。このこと自体には、全く問題があるとは思えませんし、むしろそのように切り口をはっきりさせることは、ある意味では自然現象に迫っていくための近道であると思います。しかし、相手にしているのはやはりもともと境界などのない自然現象そのものであり、便宜上の境界の引き方次第では、全く別のものになってしまうことがあります。ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーという場所は、そういう境界について私自身に再考させてくれた気がします。その中で、少しずつ分かってきたのは、同じ自然現象を対象とする同じテーマであっても自分の切り口は自分にしかない“テスト”であるということです。つまり、何を研究しているかというラベリング自体はあまり意味を持たず、その時々々の切り口で研究自体は七変化するような気がしています。したがって、如何に新しい切り口を持ってこれるかということが大事なのであり、そのことを可能にするための一つの指針は、“境界にある普遍性”というところにあるという気がしています。

違うものの中にある普遍性、それは境界に触れることによりのみ見えてくるものなのではな

いかということです。また、そのときに、自分の切り口をはっきりさせて境界に触れることが非常に大事なことなのではないかと感じています。そう言う意味で、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーという場所は、新たな切り口という非常に大きな可能性を秘めた研究環境であるけれども、そこでは、柔軟性を持ちつつ、その一方でやはり自分自身のスタンスはしっかり持っておくための努力が必要であるということを勉強させて頂く場所ともなりました。その経験は、今も新たな自分探しに繋がっているように感じます。そして、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーという遠眼鏡を通すことにより、自分のやっている研究を、客観的な目で見つめることができるようになったような気がします。

海外の研究者との交流での体験についても、私が感じたものは、過去と未来の境界としての現在だったように思います。私自身の中にも少なからずそういった考え方があるつもりでしたので、余計にはっとしたのだと思います。そのとき私自身も工学の研究をしている研究者の一人として、これは工学にも通じる真理の一つなのではと感じました。とはいっても時間を超えて残るものをそう易々と生み出すことは簡単ではないことは分かっています。ただ、「時を越えた普遍性」というものを感じ、この精神

はいつもどこかに持っていることが大切なのではと思います。私達自身が、過去と未来の境界に在ることを認識することにより未来へ繋がるものを見つけていけるのではないのでしょうか。

「終りに」

意識とともに、時とともに、また場所とともに変化していく自分というものを再発見する“自分探し”の話と一種の普遍性を見つけていく話とは一見全く正反対のようなものに思われるかもしれませんが、自分についての普遍性につながる“時を超えて変わらない自分”を探すというのは、自分自身を失わずということではなく、今の自分はこういうスタンスなんだということを実感していることが大切なのだと感じています。このことが、逆に自分自身というものを型にはめてしまわないで、まさに自分の中に隠れている自分探し(“自分の中の普遍性”探し)をすることに繋がるのではないのでしょうか。そのときできれば時を超えても“若者”であり続ける自分がどこかに見つかればと淡い期待を持っています。そういう意味で、ちょうど自分自身“若者”ということに関して、非常に微妙な時期にきたときにこのコラムを書かせて頂く機会をいただいたのは非常に有難かったと感じています。

